夢ごろも
文政十年

大正三年十月十日

名古屋市

津田西花

१उ३७ कुँवर

まひごろ

5 御世ゐ

裝幀

橋口五葉氏

裝幀

橋口五葉氏

「舞ごろも」の初めに

わたくしはこの一冊に主として近作の詩を集めました。それに就いて特に一言を添へて置きたいと思ひます。

さきごろわたくしは「歌の作りやう」一卷を書いてわたくしの短歌を作る心もちを少しばかり述べました。わたくしの詩を作る心もちも歌と同じです。わたくしは

東京都立中央図書館蔵

無學である上に順應性の非常に鈍い人間ですから、藝術上のどの主義傾向をも知らず、どの先輩の文學論や詩論にも教へられずに居ります。從つてわたくしの詩が世に謂ふ詩と云ふものになつて居るかどうかを知りません。忙しく暮して居るために詩壇に名ある人人の作物と比較して自省する時間をも持ちません。その點に於てわたくしは全く自信を缺いて居ります。

それでわたくしは此集を讀んで下さいます人達に斯う云ふことを望みます。わたくしの詩の文學的價値若

くは社會的價値を批判して頂くにはまだ餘りに早過ぎます。それよりも此集の詩に由つて、わたくしと云ふ一人の無學な女の、淺薄ではあるが眞劍な、低調ではあるが能動的な生活の象徴を專ら讀んで頂きたいのです。

最近に同じ書肆から出しました散文集「人及び女として」は、わたくしの生活の斷片的記述の範圍を越えて居りませんが、此集の詩がわたくしの生活の全的表現のために、わたくしの力一ぱいを出して居ることだけは手ごたへがあります。もとより只今の所わたくしは是だけの

力しか出し得ないみじめな境地にあることを深く深く愧ぢて居ります。

わたくしの生活はわたくしの命の焔の舞です。わたくしはこのみづからの命の悲痛、激動、愛執、驚喜の舞のために、耻を越えて無い袖をも振らねばなりません。わたくしは斯うして舞ひながら、兎にも角にも人生解放の公會に馳せ參じる一人の新しい踊子でありたいと思つて居ります。

千九百十六年五月　　與謝野晶子

舞ごろも　目次

自序

短歌……三

折折の小曲

三十女の心……九一

わが愛欲は限りなし……九二

チユウリツプ……九三
五月雨……九四
庭に繁れる雜草も……九六
うすずみ色の梅雨空に……九七
今夜の空は血を流し……九九
コスモスの花……一〇〇
巴里に着いた三日目に……一〇一
眞晝の中に夜が來た……一〇三
新たに挿んだ薔薇ながら……一〇三
朝露のおくままに……一〇四
初秋の日の砂の上……一〇五
ほんに淋しい時が來た……一〇七
一むら立てる屋根の草……一〇八
あはれ漸く我心……一一〇

第一の陣痛

第一の陣痛……一一三
旅行者……一一七
何かためらふ……一二〇
眞實へ……一二二
過ちつつあり……一二五
途上……一二八
三つの路……一三一
森の大樹……一三五
われは雜草……一四一
子供の踊……一四三
砂の上……一四六

雜草

牡丹……一四三
初夏……一五五
雜草……一五八
暴雨……一六二
新秋の歌……一六五
初秋の月……一六八
朝顏の花……一七一
秋の盛りの美くしや……一七三
風の夜……一七五
小猫……一八〇
雪の朝……一八六
記事一篇……一九〇

旅のおもひで

西部利亞所見……一九七
エトワアルの廣場……二〇一
ムウラン・ド・ラ・ギヤレットにて……二〇九
薄暮……二一一
エルサイユの逍遙……二一三
磯の朝……二一八
フオンテンブロウの森にて……二二四
ミユンヘンの宿……二二七
伯林停車場……二二九

砂の塔

砂の塔……二三九

我手の花……二四五
古巣より……二四七
善しや悪しやを言ふ人の……二五〇
闇に釣る船……二五一
灰色の一路……二五六
厭な日……二六〇
砂……二六三
怖ろしい兄弟……二六五
獣獣の群……二七〇

舞ごろも

與謝野晶子

短歌

まぼろしが幻(まぼろし)として消(け)ぬ薬われのみぞ持つ
君のみぞ持つ

女より選ばれ君を男より選びし後(のち)のわが世
なり是れ

その若さ戀をするなり遊ぶなり物思ひには
自らあたる

千よろづの言葉も唯だの一言も云はぬも聞
きてかなし女は

おぼらかになりぬと聞くも淋しけに見ゆる
と聞くもはた同じこと

あな戀し琥珀の色の冬の日の中に君あり椿
となりて

わが愁これにもとづく理を今は一日も後に
知らしめ

なほ姿君が見ん時誰よりも鮮かなれと願は
ぬ日なし

明日の日に忙しく焦れはた思ふ二十と云ひ
し年のあとさき

病して三日に一日はこし方の恨めしさをば
思ふ身のほど

人の云ふ歎き疲れし身のごとく戀するわれ
も思ふものかな

なつかしき境にありて君としぬ泣くことも
はた戯れごとも

相住みて片戀をすとゆゆしかる大ひがごと
を云ふ人となる

天地のいたづらになることよりも愁ふるこ
とは君にただごと

いみじくも妬しと云へば彼を今殺さんと云
ひ門を出で行く

思ふ子とありのすさびに立ち別れわが片戀
に高名となる

君もまた未だまことにかばかりにわれを憎
むと知らぬなりけり

ことのさま裏を表に置きかへて思はれて來
しわれと思はん

思はれて來し身ならばと云ふことを夢寐に
忘れずわれは今日さへ

戀と云はば戀と云はさん寛容を示し給へど
世と共に泣く

かたはらに秤を持てる女居て昔と今の目の
みかぞふる

誰ならん世の常事のかたはらに人を忘れん
苦行を積むは

その中によしなしごとも見は見つれなつか
しきかな忘られぬかな

片戀に涙ながしてあるここち我れのみせめ
て知れるなりせば

悲みのいみじき身かとわがことを自ら問は
る何ならん是れ

柔順なる君は友なりかく云ふにいつはりも
無しあはれはかなし

わが生命三日四日の後いかにとも知らぬ時
さへ戀しきものを

何ごとも云はぬならひに年ふれば空涙とも
人の見るらん

夕ぐれの障子の外に松鳴れば今朝別れこし
東京戀し（以下七首茅が崎にて）

わが子等を鳥のたぐひに思ひつつこの砂山
に集ひ來と待つ

朝まだき青羽の鴨の這ひいでぬ厩に似たる
海人の家より

この莊は一昨日の客昨夜の客簀子に溢れ春
風を愛づ

茅が崎の松の間に四五寸の麥植ゑられて春
風ぞ吹く

海風は尖れるものの心地しぬかの病院の風
車ゆゑ

砂山にやや風つよし伏して云ふしめやかな

らず君に似るかな

春の日の明るき方を後ろにし柱ならびぬ人

の如くに

正月は馬の蹄の音もよし間近にものの本繰

るもよし

正月の爐に寄るここち限りなし一人なりせ

ばさては知らねど

かれのよしこれのよしなど思ふこと癖とならまし正月の後

ささやかに雲立ちのぼる少女子の羽子の板より雲立ちのぼる

正月に紅の帶負はぬこと少し恨めど歌などを書く

正月に戀をつくれば弟が獨樂まはしする板の玄關

くろ髪の餘り清くて櫛き子もわれも突くな
る羽子の音かな

友染をなつかしむこと限りなし春の來るた
め京思ふため

くれなゐの小き杯たまはれば椿の花のここ
ちして取る

一人づつはた二人づつ羽子は突く我等の戀
もかからましかば

いみじかる元日の日の晝の風われと君との
ほとりに遊ぶ

正月の家と家との間より尾振りて來れば犬
もめでたし

都邊の玉を敷くてふ路よりも白くめでたき
正月の箸

尋ほどもこの地の上を立ちはなれよろこぶ
ことを正月と云ふ

目のまへに春の來りし喜びの外に唯今何ごとも無し

正月の二日の朝に櫛とりてうらなつかしき黑髪を梳く

うす白き門の口見ゆ元日のわがつれづれに障子明くれば

春立つをよろこぶ人に似る霰少し落せる正月の空

ふさがれて流れざる水わが胸に百年ばかり
あるここちする

火の絲も銀絲の筋も見ゆるなり亂れ心地の
なつかしきかな

くらき夜の遠方の火事黄の銀杏燃えは燃ゆ
れど火は火なれども

冬は憂し木立も上の大ぞらも牛の角かと思
ふ色する

みぞれすと留めし人とする話少し淋しく哀
れになりぬ

雪の日の池の底にも動く魚あるいみじさよ
戀に似るかな

思ふ人姿を借りて戀しやと云はしむるごと
春の雪降る

汝が群と少し變れどはかなごと云ひ合ふな
りと春の雪降る

いく筋の黄の帶のごと日の射しぬ雪解の音
の今立ちぬべし

雪の日の門の口より見ゆるなり黑くめでた
き馬の前脚

傘さして去にたる人を憎みけりその雪の傘
うつくしきため

うぐひすや石の浴槽のここちする
閨の春のあけがた

いづくにか悲しき鐘の鳴り出でしここちす
春の雲のうごけば

夜のここち重く苦しく朝ごこちきはまりも
なく浮き立つ春は

春の日の輝くものとやや近くやや遠く居て
病するかな（以下十八首病床にて）

わが夫子が松の枯れしを切らせ居ぬおのれ
病むなる春の夕に

隣なる不開の門の裏見つつ二階に病めばう
ぐひすの啼く

みづからの病むことをのみ思ふ日は心安し
と君に洩せし

よその子の唯だの噂をかばかりに身に沁む
と聞く母と知らずも

病をば病と少し知り初めぬこの子死ぬをも
死ぬと知るべき

死ぬことを温泉に行き浸るごと思ふと子等
に告げて笑ひぬ

かりそめに容貌おとろへたらんなど思はぬ
きはの病となりぬ

この門を一つくぐらばはてもなく廣き心と
ならんものから

死ぬことも夢のやうなることながら重ぐる
しきや戀に比べて

近き日に生命盡くると云ふことをいとおほ
らかに思へりわれは

風となり雲となりはた水となる自在を得べ
きわがいく日後

死にてのち忘られざらん思ひ出でよかく願
ふ人日に變り行く

姉上に物を賜へと文書くはかなしされども
今しばしのみ

夜明がた舌いと乾くまだ斯かる心の苦には
逢はずして死ぬ

いともろきそが玩具よりいち早く滅びんも
のを子等は知らなく

なげくこと多かりしかど死ぬきはに子を思
ふことよろづにまさる

死ぬことは大事なれどもわが心眠さも眠し
この昨日今日

こころよく小ごめ櫻が銀を延ぶ夕の月に朝
のひかりに

地の上のくれなゐの雲天上の雲より盛り久
しかりけれ

わが涙大川の色いと青くなりぬと書けばあ
たたかに落つ

春の夢ながく醒めざる人なれば四月の後も
花を思へり

春風に青き柳のうごく時生くるかひあるこ
こちこそすれ

みづからを知ること未だ淺しとて吾を苛(さいな)む
日のみつづきぬ

あはれにも狂ふがごとく遠(をち)方(かた)の人の心を見
てあるこころ

そのゆふべ洗ひし髪も乾(かは)きぬとひとりごつ
日の幾(いく)日(か)つづくぞ

人よりも母のつとめも知れるごと君あらぬ
日にふるまふは誰

なほ七日君かへらずと灯にかこち机に語り
わびしらに居ぬ

日にあらず夜さへ晝さへわれ照らすいみじ
きものと今別れ居り

目に見えぬ鬼にさらはれ來しここち君なく
てする我家ながら

かりそめに旅して寐ると夜などを安らかに
居ん夢は見んとも

かたはらにあれどもそれは隱れ簑被てあり
としてかつ淋しけれ

十日ほど人の旅する唯ごとに胸のせまるも
あはれはかなし

ひるまへの雨も晴れたる夕方の入日もさび
し君西に居て

やすからぬ日にさもあらぬ日のつづき悟り
も得せずなほ若きほど

君われを忘れぬことの安けさをわが衰への
偸み見するも

ことごとく君の心を占むるよりわれ衰へぬ
證得てまし

身の戀に添へて守れど面影は今日の勝らず
去年の昨日に

わが戀は外に光らずかがやかず華やぐこと
のあらぬものから

前わたる風さへ君のここちして二心なきも
のぞなど聞く

湯に下りぬ一重ざくらの散ることを二人三
人に文書ける後

衰ふるものも美くし三十路をばうしろに白
き山ざくら散る

うら淋し雨だれほどのひまおきて櫻ちるなり今日を初めに

五月雨の來てむせぶなり清水の音羽の山の石のきざはし

咲き散るを心に任すもののごと我れ思ふなり初夏の花

身の中にアマリリスより紅き花咲かせて人見るとしぞ思ふ

砂山のかたはらの砂撫でられぬまほに物を
ば思ふと無しに

鋏もて稚児の爪をば切る母のあなあやふや
と思ふ初夏

日輪の光のごとき黄菅をばくろ馬の食む快
きおと

二尺ほどわれより低きかきつばた菖蒲の花
ももろともに待つ

初夏の空の光に從ひて戀のこころの花さう
び咲く

いと深く君思ふとき降り止みて更に零るる
初夏の雨

夏の花吐息のごとく匂ひくるたそがれまへ
の廣き家かな

朝風や蠶の鳥に似る牡丹草分けて切る小
き牡丹

内に咲き外より咲けば初夏の花もくるしや
救ひ給へな

木の花のうす紅をして猶にほふ中をいみじ
き五月風吹く

柳濃くなりぬ御堂の大徳も舞姫たちも袷着
てより

餘りある思ひと云ふは初夏のそよ風にしも
似たるものかな

君見んと心の進むそれのごと春より變る夏
の待たれし

このわが世戀しき人と初夏の二つをめでて
光あまねし

しやがの花身を雜草として咲けど夏を染む
なりうす紫に

初夏や吹くもあほるも扇より勝らぬ風のに
くからぬかな

二三本あをき芽をふく木のありて山の心地
す初夏の風

初夏のちから頼もし枝ごとに黄金の汗すと
見えて芽をふく

ひきがへるのそりと出でて延べし背の土い
つぱいに大いなるかな

ひきがへる大事の前に片足を後ろに延べて
時を窺ふ

かにかくも皐月は悲しもの思ふ家の小暗さ
外の明るさ

物思ふわれに少しの關りも無きさまするが
めでたし夏は

園のうち薔薇の門を七つ八つくぐればやが
て夕となりぬ

風吹けば烈しくもゆる紅の罌粟身もだへな
げく一重白げし

薔薇の花朝朝摘めと咲くことも夏は嬉しや

水の鳴れるも

高高と噴水盤を持ち上ぐる眞白き童すがし

やタ

からたちの花を吹くとき酒倉を覗くここち

に風のかんばし

佛蘭西の紅き芍藥それなども喜びとして我

の目に見ゆ

ひなげしと矢ぐるまの花朝の靄ロアルの川
の清き水おと

ひなげしが置かれし膝の並ぶなるセエヌの
船の狹き甲板

旅人の朝の酒宴に罌粟を置くロアルの岸の
石の卓かな

睡蓮の花びらの先苦しくも少し尖れりわが
心ほど

六月は酒を注ぐや香を撒くや春にまさりて
心ときめく

わが部屋に脚長の蚊の來て舞へる皐月の晝
に物をこそ思へ

南風ふるき疊の色をして吹き出づる時われ
あぢきなし

門のうち馬車行きちがふ初夏の若葉の棕梠
の夕月夜かな

涙よりいみじきものを貯へしこころの人も
ほこりかに居ぬ

なにとなく若き芭蕉の葉の肌のうち思はる
る朝ぼらけかな

藏のうち朱塗白木の長持が油紙被る皐月と
なりぬ

ふるさとのせむしの叔母が縮着る夏いと近
し雨がへる鳴く

大空を路とせし君いちはやく破滅を踏みぬ
かなしきかなや

（以下十五首飛行機に乘れる木村、徳田兩中尉の殉難を弔ひて）

うら若き二羽の隼血に染みて啼く音絶えた
る二羽の隼

この二人新しき世の死の道を敎ふることす
誰か及ばん

あなと云ふ一瞬に來ぬ虛無の虛無奈落の奈
落しらぬわざはひ

久方の青き空よりわがむくろ埴に投ぐるも
大君のため

めでたかる春の光にこの君等何物よりもい
たましく死ぬ

地に聞けばいと恐ろしきことながらかの天
近く笑みてかみさる

現身のくだけて散るを飛行機のはがねの骨
とひとしく語る

若き子が鳥の死ぬごと地に落ちぬかたじけなさよ涙ながるる

吾妹子と春の朝に立ちわかれ空の眞晝の十二時に死ぬ

新しき世の犧牲かなし御空行き危きを行きむなしくなりぬ

誰か世に犧牲とはならぬ斯く知れどいたましきかな先立てる君

虚無に裂け奈落に碎くあはれあはれ唯うす
白き塵ひぢのごと

もの云ひのさがなき人も知ることのいみじ
き人も君達に泣く

青空を名残のものと大らかに親も見たまへ
妻も見たまへ　（以上）

我にある百とせは皆わかき日と頼みて之を
空しくもせじ

太陽のもとに物みな汗かきて力を出だす若き六月

みづからを支ふる力はしけやし夏の木立の如くあらまし

折折の小曲

三十女の心

三十女の心は
陰影も、煙も、
音も無い火の塊、
夕焼の空に
一輪眞赤な太陽、
唯じつと徹して燃えて居る。

わが愛欲は限りなし

わが愛欲は限りなし、
今日のためより明日のため、
香油をぞ塗る、更に塗る。
知るや、知らずや、戀人よ、
この樂さを告げんとて
わが唇を君に寄す。

チユウリップ

今年も五月、チユウリップ、
見る目まばゆくぱつと咲く、
猩猩緋に咲く、黄金に咲く、
紅と白とをまぜて咲く、
人に構はず派手に咲く。

五月雨

今日も冷く降る雨は
白く盡きざる涙にて、
世界を掩ふ梅雨空は
重たき繻子の喪の掛布。

空は空とて悲しきか、
かなしみ多き我胸も

墨と銀との泣き交す
ゆふべの色に變る頃。

庭に繁れる雑草も

庭に繁れる雑草も
見る人によりあはれなり、
心に上る雑念も
一一見れば捨てがたし。
あはれなり、捨てがたし、
捨てがたし、あはれなり。

うすずみ色の梅雨空に

うすずみ色の梅雨空に、
屋根の上からふわふわと
たんぽぽの穂が白く散る。

熱と笑ひを失つた
老いた世界の肌皮が
枯れて剝れて落ちるのか。

たんぽぽの穂の散るままに、
ちらと滑稽けた骸骨が
前に踊つて消えて行く。

今夜の空は血を流し

今夜の空は血を流し、
そして俄かに氣の觸れた
嵐が長い笛を吹き、
海になびいた藻のやうに
斷えずゆらめく木の上を、
海月のやうに青ざめた
月がよろよろ泳ぎゆく。

コスモスの花

少しつめたく、匂はしく、
清く、はかなく、たよたよと、
コスモスの花高く咲く。
秋の心を知る花か、
うすももいろに高く咲く。

巴里に着いた三日目に

巴里に着いた三日目に
大きい眞赤な芍藥を
帽の飾りに附けました。
こんな事して身の末が
どうなるやらと言ひながら。

眞晝の中に夜が來た

眞晝の中に夜がきた。
空を行く日は青ざめて
永のやうに冷えて居る。
わたしの心を通るのは
黑黑とした蝶のむれ。

新たに挿した薔薇ながら

新たに挿した薔薇ながら
古い香りを立てて居る。
初めて聞いた言葉にも
昨日の聲がまじつてる。
眞實心を見せたまへ。

朝露のおくままに

朝露のおくままに、天地は
サフイイルと、青玉と
眞珠を盛れるギヤマンの室。
朝の日の昇るまま、天地は
黄金と、しろがねと
珊瑚をまぜしモザイクの壁。
その中に歌ふトレモロ——秋の初風。

初秋の日の砂の上

初秋の日の砂の上に
ひろき葉一つ、はかなくも
薄黄を帶びし灰色の
影をば曳きて落ち來る。
あはれ傷つく鳥ならば
血に染みつつも叫ばまし、
秋に堪へざる落葉こそ

反古にひとしき音すなれ。

ほんに淋しい時が來た

ほんに淋しい時がきた、
驚くことが無くなつた。
薄くらがりに青ざめて
しよんぼり一人手を重ね、
戀の歌にも身が入らぬ。

一むら立てる屋根の草

一むら立てる屋根の草、
何の草とも知らざりき。
梅雨の晴間に見上ぐれば、
綿より脆く、白髪より
小く、はかなく、折折に
たんぽぽの穂かふわと散る。

何か心の無かるべき。
ほつと氣息をばつきながら
思ひあまりて散るならん、
梅雨の晴間の屋根の草。

あはれ漸く我心

あはれ漸く我がこころ
怖るることを知りそめぬ、
たそがれ時の近づくを。
否とは云へど、我がこころ
あはれ漸くうら寒し。

第一の陣痛

第一の陣痛

わたしは今日病んで居る、
生理的に病んで居る、
わたしは默つて目を開いて
産前の床に横になつて居る。

なぜだらう、わたしは
度度死ぬ目に遇つて居ながら、

痛みと、血と、叫びに慣れて居ながら、
制しきれない不安と恐怖とに慄へて居る。
若いお醫者がわたしを慰めて、
生むことの幸福を述べた。
そんな事ならわたしの方が餘計に知つて居る、
それが今なんの役に立たう。
知識も現實でない、
經驗も過去のものである。

みんな黙つて居て下さい、
みんな傍觀者の位地を越えずに居て下さい。
わたしは唯だ一人、
天にも地にも唯だ一人、
じつと唇を嚙みしめて
わたし自身の不可抗力を待ちませう。
生むことは、現在、
わたしの内から爆ぜる

唯だ一つの眞實創造、
もう是非の際も無い。

今、第一の陣痛……
太陽は俄に青白くなり、
世界は冷やかに鎭まる。
さうして、わたしは唯だ一人……

旅行者

霧の籠めた、太洋の離れ島、
此島の街はまだ寢て居る。
どの茅屋の戸の透間からも
まだ夜の灯が日本酒色を洩して居る。
偶〻赤んぼの啼く聲はするけれど、
大人は皆たはいもない夢に耽つて居る。

突然、入港の號砲を轟かせて
わたし達は夜中に此處へ着いた。
さうして時計を見ると、今、
陸の諸國でもう朝飯の濟んだ頃だ、
わたし達はまだホテルが見附からない、
まだ兄弟の誰れにも遇はない。

年ぢゆう旅して居るわたし達は
世界を一つの公園と見て居る。
さうして自由に航海しながら、なつかしい

生れ故郷の此島へ歸つて來た。
島の人間は奇怪な侵入者、
不思議な放浪者だと罵らう。

わたし達は彼等を覺さねばならない、
彼等を生の力に溢れさせねばならない、
よその街でするやうに、
飛行機と露西亞バレエの調子で
彼等と一所に踊らねばならない、
此島もわたし達の公園の一部である。

何かためらふ

何かためらふ、内氣なる
わが纖弱なるたましひよ、
幼兒のごと慄きて
な言ひそ、死をば避けましと。
正しきに就け、たましひよ、
戰へ、戰へ、みづからの

しあはせのため、悔ゆるなく、
恨むことなく、勇みあれ。
飽くこと知なぬ口にこそ
世の苦しみも甘からめ、
わがたましひよ、立ち上り、
生に勝たんと叫べかし。

眞實へ

わが暫く立ちて沈吟せしは
三筋ある岐れ路の中程なりき。
一つの路は崎嶇たる
石山の巓に攀ぢ登り、
一つの路は暗き大野の
扁柏の森の奥に迷ひ、
一つの路は河に沿ひて

平沙の上を滑り行けり。

われは幾度か引近さんとしぬ、
來し方の道には
人間三月の花開き、
紫の霞、
金色の太陽、
甘き物の香、
柔かきそよ風、
われは唯だ幸ひの中に醉ひしかば。

されど今は行かん、
かの高き石山の彼方、
あはれ其處にこそ
猶我を生かす路はあらめ。
わが願ふは最早安息にあらず、
夢にあらず、思出にあらず、
よしや、足に血は流るとも、
一歩一歩、眞實へ近づかん。

過ちつつあり

兩手にて抱かんとし、
手の先にて掴まんとする我等よ、
我等は過ちつつあり。

手を揚げて、我等の
抱けるは空の空、
我等の掴みたるは非我。

唯だ我等を疲れしめて、
すべて滑り、
すべて逃れ去る。

いでや手の代りに
全身を擴げよ、
我等の所有は此内にこそあれ。

我を以て我を抱けよ、

我を以て我を攫め、
我に勝る眞實は無し。

途上

友よ、今ここに
我が世の心を言はん。
我は常に行き着かで
途の半にある如し、
また常に重きを負ひて
喘ぐ人の如し、
またさびしきことは

年長けし石婦の如し。
さて百千の段ある坂を
我はひたぶるに登る。
わが世の力となるは
後ろより苛む苦痛なり。
われは愧づ、
静かなる日送りを。
そは怠惰と不純とを編める
灰色の大網にして、
黄金の時を捕へんとしながら

獲る處は疑惑と悔のみ。
我が諸手は常に高く張り、
我が目は常に見上げ、
我が口は常に呼び、
我が足は常に急ぐ。
されど、友よ、
ああ、かの太陽は遠し。

三つの路

わが出でんとする城の鐵の門に
斯くこそしるされたれ。
その字の色は眞紅、
恐らくは先きに突破せし人の
みづから指を咬める血ならん。
「生くることの權利と、
其のための一切の必要。」

われは戰慄し且つ躊躇らひしが、
やがて微笑みて頷きぬ。
さて、すべて身に着けし物を脱ぎて
われを逐ひ來りし人人に投げ與へ、
われは玲瓏たる身一つにて逃れ出でぬ。
されど一歩して
ほつと呼吸をつきし時、
あはれ、目に入るは
萬里一白の雪の廣野……
われは自由を得たれども、

わが所有は、この刹那、
否、永劫に、
この纖弱き身一つの外に無かりき。
われは再び戰慄したれども、
唯だ一途に雪の上を進みぬ。
三日の後
われは大なる三つの岐路に出でたり。
ニイチエの過ぎたる路、
トルストイの過ぎたる路、
ドストイエフスキイの過ぎたる路、

われは其何れをも擇びかねて、
沈默と逡巡の中に、
暫く此處に停まりつつあり。
わが上の太陽は青白く、
冬の風四方に吹きすさぶ……

森の大樹

ああ森の巨人、
千年の大樹よ、
わたしはそなたの前に
一人のつつましい自然崇拜教徒である。
そなたはダビテ王のやうに
勇ましい拳を上げて

地上の赦しがたい
何の惡を打たうとするのか、
また、そなたはアトラス王が
世界を背中に負つて居るやうに、
かの青空と太陽とを
兩手で支へようとするのか。

そしてまた、そなたは
どうやら、心の奥で、
常に惱み、

常にじつと忍んで居る。
それがわたしに解る、
おまへの鬱蒼たる枝葉が
休む間なしに汗を流し、
休む間なしに戰くので。
さう想つてそなたを仰ぐと、
希臘闘士の胴のやうな
そなたの逞しい幹が
全世界の苦痛の重さを
唯ひとりで背負つて

永遠の中に立つて居るやうに見える。

或時、風と戰つては、
そなたの梢は波のやうに逆立ち、
荒海の響を立てて
勝利の歌を揚げ、
また或時、積む雪に壓されながらも
そなたの目は日光の前に赤く笑つて居る。

千年の大樹よ、

蜉蝣の命を持つ人間のわたしが
どんなにそなたに由つて
元氣づけられることぞ。
わたしはそなたの蔭を踏んで思ひ、
そなたの幹を撫でて歌つて居る。

ああ、願くは、死後にも、
わたしはそなたの根方に葬られて、
そなたの清らかな樹液と
隱れた熱い涙とを吸ひながら、

更にわたしの地下の
飽くこと知らぬ愛情を續けたい。

なつかしい大樹よ、
もう、そなたは森の中に居ない、
常にわたしの魂の上に
爽やかな廣い蔭を投げて居る。

われは雜草

森の木蔭は日に遠く、
早く涼しくなるままに、
纖弱く低き下草は
葉末の色の褪せ初めぬ。

われは雜草、しかれども
猶わが欲を煽らまし、

もろ手を延べて、遠ざかる
夏の光を追ひなまし。

死なじ、飽くまで生きんとて、
みづから恃むたましひは
かの大樹にもゆづらじな、
われは雑草、しかれども。

子供の踊

（唱歌用として）

踊、
踊、
桃と櫻の
咲いたる庭で、
これも花かや、紫に
圓く輪を描く子供の踊。

踊、
踊、
天をさし上げ、
地を踏みしめて、
みんな凛凛しい身の構へ、
物に怖れぬ男の踊。

踊、
踊、
身をば紙めに

袂をかざし、
振れば逆らふ風も無い、
派手に優しい女の踊。

踊、
踊、
鍬を執る振、
綜引く姿、
そして世の中いつまでも
圓く輪を描く子供の踊。

砂の上

「働く外は無いよ、」
「こんなに働いて居るよ、僕達は、」
威勢のいい聲が
頻に聞える。
わたしは其聲を目當に近寄つた。
薄暗い砂の上に寢そべつて、
煙草の煙を吹きながら、

五六人の男が
おなじやうなことを言つて居る。

わたしもしよざいが無いので、
「まつたくですね」と聲を掛けた。
すると、學生らしい一人が
「君は感心な働き者だ、
女で居ながら、」
斯うわたしに言つた。
わたしは未だ働いたことも無いが、

褒められた嬉しさに
「お仲間よ」と言つた。

けれども、目を擧げると、
その人達の塊の向うに、
夜の色を一層濃くして、
まつ黒黒と
大勢の人間が坐つて居る。
みんな默つて俯向き、
一秒の間も休まず、

力いつぱい、せつせと、
大きな網を編んで居る。

雜草

牡丹

エルサイユ宮を過ぎしかど、
われは之に勝る花を見ざりき。
牡丹よ、
葉は地中海の桔梗色と群青とを盛り重ね、
花は印度の太陽の赤光を懸けたり。
たとひ色相はすべて空しとも、
何か傷まん、

牡丹を見つつある間は
豐麗炎熱の夢に我の浸れば。

初夏

ああ夏が來た。この晝の
若葉を透す日の色は
ほんに酒ならペパミント、
黃金と綠を振り注ぎ、
廣く障子を開けたれば
子供のやうな微風が
衣桁に掛けた友染の

長い襦袢に戯れる。

ああ夏が來た。こんな日は
君もどんなに戀しかろ、
巴里の廣場、街並木、
珈琲店の前庭、BOIの池。
私も筆の手を止めて、
晴れたSEINEの濃紫
今その水が目に浮び、
じつと涙に濡れました。

ああ夏が來た、夏が來た。
二人の畫家とつれだつて、
君と私がAMIANの
塔を觀たのも夏である。
二度と行かれる國で無し、
私に帽をさし出した
お寺の前の乞食に
物を遣らずになぜ來たか。

雜草

庭いちめんにこころよく
すくすく繁る雜草よ、
彌生の花に飽いた目は
ほれほれとして其れに向く。
人の氣づかぬ草ながら、
十三塔を高く立て
風の吹くたび舞ふもある。

女らしくも手を伸ばし、
誰れを追ふのか、抱くのか、
上目づかひに泣くもある。
五月のすゑの外光に
汗の香のする全身を
香爐としつつ焚くもある。
名をすら知らぬ草ながら、
葉の形見れば限りなし、
さかづきの形、とんぼ形、
のこぎりの形、楯の形、

ペン尖の形、針の形。
また葉の色も限りなし、
青梅の色、鶸茶色
綠青の色、空の色、
それに裏葉の海の色。
青玉色に透きとほり、
地にへばりつく或葉には
綠を帶びた佛蘭西の
牡蠣の薄身を思ひ出し、
なまあたたかい曇天に

細かな砂の灰が降り、
南の風に草原が
のろい廻渦を立てる日は、
六坪ばかりの庭ながら
紅海沖が目に浮ぶ。

暴雨

洗濯物を入れたまま
大きな盥が庭を流れ、
地が俄に二三尺も低くなつたやうに
姫向日葵の欝金の花の尖だけが見え、
ごむ手毬がついと縁の下から出て、
潜水服を着たお伽噺の怪物の顧眄をしながら、
腐つた紅いダリアの花に取り縋る。

五六枚しめた雨戸の間間から覗く家族の顔は
どれも栗毛の馬の顔である。
雨はますます白い刄のやうに横に降る。
わたしは颶風にほぐれる裾を片手に抑へて、
泡立つて行く濁流を胸がすく程じつと眺めた。
膝ぼしまで水に漬つた郵便配達夫を
人の木が歩いて來たのだと見ると、
濡れた足の儘廊下で跳り狂ふ子供等が
眞鯉の子のやうに思はれた。

ときどき不安と、驚奇との氣分の中で、
今日の雨のやうに、
物の價値の顚倒るのは面白い。

新秋の歌

初秋は來ぬ、白麻の
明るき蚊帳に臥しながら、
夜の更けゆけば水色の
麻の輕きを襟近く
打被くまで涼しかり。

上の我子は二人づれ

大人の如く遠く行き、
夏の休みを陸奥の
山邊の友の家に居て
今朝うれしくも歸りきぬ。

休みのはてに己が子と
別るる鄙の親達は
夏の盡くるや惜しからん、
都に住めるしあはせは
秋の立つにも身に知らる。

貧しけれども、わが家の
今日の夕食の樂しさよ、
黑川郡の山邊にて
我子の採れる百合の根を
我子と共にあぢはへば。

初秋の月

世界はいと靜かに
涼しき夜の帳に眠り、
黄金の魚一つ
その差延べし手に光りぬ、
初秋の月。

紫水晶の海は

黑き大地に並びて夢み、
一つの波は彼方より
柔かき節奏に
その上を馳せ來る。

波は次第に高まる、
麥の畝の風に逆ふ如く。
さて長き磯の上に
擴がり、擴がる、
しろがねの網として。

波は幾度もくり返し
奇しき光の魚を抱かんとす、
されど網を知らで、
常に高く彼處に光りぬ、
初秋の月。

朝顔の花

朝顔の花うらやまし、
秋もやうやく更けゆくに、
眞垣を越えて、丈高き
梢にさへも攀ぢゆくよ。

朝顔の花、人ならば
匂ふ盛りの久しきを

世や憎みなん、それゆゑに
思はぬ恥も受けつべし。

朝顔の花、めだたくも
百千の色のさかづきに
夏より秋を注ぎながら、
飽くこと知らで日にぞ醉ふ。

秋の盛りの美くしや

秋の盛りの美くしや、
蘩蔞の葉さへ小さなる
黄金の印をあまた佩び、
野葡萄さへも瑠璃を掛く。

百舌も鶺も肥えまさり、
里の雀も烏らしく

晴れたる空に群れて飛び、
蜂も巣毎に子の歌ふ。

小豆色する房垂れて
鶏頭高く咲く庭に、
一しきり射す日の入りも
涙ぐむまで身に沁みぬ。

風の夜

をりをりに氣が附くと、
屋外には嵐……
戸が寒相にわななき、
垣と軒がきしめく……
どこかで幽かに鳴る二點警鐘……
子供等を寢かせたのは

もう昨日のことのやうである。
狭い書齋の灯の下で
良人は默つて物を讀み、
わたしも默つて筆を執る。

きりきり……きりきり……
何かしら、冴えた低い音が、
ふと聞えて途切れた……
きりきり……きりきり……
あら、また途切れた……

嵐の音にも紛れず、
直ぐ私の後ろでするやうに、
今したあの音は、
臆病な、低い、そして眞劍な音だ……
命のある者の立てる快い音だ……

或直覺が私に閃く……鋼鐵質の其音……
私は小さな聲で行つた、
「あなた、何か音がしますのね」

良人は默つてうなづいた。
其時また、きりきり……きりきり……

「追つて遣らう、
今夜なんか這入られては、
こちらから謝らなければならない」
と云つて良人は、
笑ひながら立ち上つた。

私は筆を止めずに居る。

私には今の、嵐の中で戸を切る、
臆病な、低い、そして眞劍な音が
自分の仕事の伴奏のやうに、
ひつたりと合つて快い。

もう女中も寢たらしく、
良人は次の室で、
みづから燐寸を擦つて、
そして手燭と木太刀とを提げて、
廊下へ出て行つた。

間も無く、ちりんと鈴が鳴つて、
門の潜り戸が幽かに開いた。
「逃げたのだ、泥坊が」と、
私は初めてはつきり
嵐の中の泥坊に氣が附いた。

私達の財嚢には、今夜、
小さな銀貨一枚しか無かつた。
私は私達の貧乏の慘めさよりも、

一人の知らぬ男の無駄骨を氣の毒に思つた。
きりきり……きりきり……と云ふ音がまだ耳にある。

小猫

小猫、小猫、かはいい小猫、
坐れば小く、まんまろく、
歩けばほつそりと、
美くしい、眞つ白な小猫、
生れて二月たたぬ間に
孤蝶樣のお宅から
わたしのうちへ來た小猫。

子供達が皆寢て、夜が更けた。
一人わたしが蚊に食はれ
書齋で默つて物書けば、
小猫よ、おまへは淋しいか、
わたしの後ろに身を擦り寄せて
小娘のやうな聲で啼く。

こんな時、
先の主人はお優しく

そつとおまへを膝に載せ
どんなにお撫でになつたことであろ。
けれど、小猫よ、
わたしはおまへを抱く間がない、
わたしは今夜
もうあと十枚書かねばならんのよ。

夜がますます更けて、
午前一時の上野の鐘が幽かに渡る。
そして、何にじやれるのか、

小猫の首の鈴が
次の室で鳴つて居る。

雪の朝

夜が明けた。
風も、大氣も、
鉛色の空も、
野も、水も
みな氣息を殺して居る。

唯だ見るのは

地上一尺の大雪……
それが畝畝の直線を
すつかり隱して、
いろんな三角の形を
大川に沿うた
歪形な畑に盛り上げ、
光を受けた部分は
板硝子のやうに反射し、
陰になつた所は
粗惡な洋紙を撒きちらしたやうに

鈍く艶を消して居る。

そして所所に
幾つかの
不格好な胴像が
どれも痛痛しく
手を失ひ、
脚を斷たれて、
眞白な胸に
黑い血を滲ませながら立つて居る。

それは枝を拂はれたまま
じつといきんで
死なずに春を待つて居る
太い櫟の幹である。
たとへば私達のやうなものである。

記事一篇

今は
（私は正しく書いて置く。）
一千九百十六年一月十日の
午前二時四十二分。
そして此時から十七分前に、
一つの不意な事件が
私を前後不覺に

くつくつと笑はせた。

宵の八時に
子供達を皆寢かせてから、
良人と私はいつもの通り、
全く默つて書齋に居た。
一人は書物に見入つて
折折そつと辭書を引き、
一人は締切に遲れた
雜誌の原稿を書いて居た。

毎夜の習はし……
飯田町を發した大貨物列車が
崖上の中古な借家を
船のやうに振盪つて通つた。
この器械的地震に對して
私達の反應は鈍い、
唯だぼんやり
もう午前二時になつたと感じた外は。

それから間も無くである。
庭に向いて机を据ゑた私と
雨戸を中に一尺の距離もない
直ぐ鼻の先の外で、
突然、一つの嘘が破裂した……
「泥坊の嘘だ、」
刹那にかう直感した私は
思はずくつくつと笑つた。
「何んだね」と良人が振向いた時、

其不可抗力の聲に氣まり惡く、
あわててて口を抑へて、
そつと垣の向うへ逃げた者がある。
「泥坊が嘘をしたんですわ、」
大洋の底のやうな六時間の沈默が破れて、
二人の緊張が笑ひに融けた。
こんなに滑稽な偶然と見える必然が世界にある。

旅のおもひで

西部利亞所見

汽車は吼ゆ。
されどシベリヤの
雪と氷の原を行く汽車は
胴體こそ巨大の象のやうなれ、
この怪獸は石炭の餌を與へられず、
薪のみを食らへば、
吼ゆる聲の力無く、

のろのろと膝行りゆく。

露西亞文字を讀み得ざれば、
今停まれるは何と云ふ驛か知らず。
荒野の中の小き停車場に
人の乘降も無く、
落葉したる白楊の木
其處此處に聳えて、
灰色の低き空の下
五月の風猶雪を散らせり。

汽笛の叫びに引かれて、
男、女、子供、
すべて靴を穿かぬ
シベリヤの農民等は
手に手に、大なる罐を、
鷄を、牛乳を捧げて、
汽車の窓に馳せ寄り、
かしましく買へと云ひぬ。

やうやくにして汽車はゆるぎ出づ。
猶しばし顧客を求めて
農民等は窓の外を走りしが、
食堂車とその値や繩りけん、
幾羽かの雁と一藍の馬鈴薯のために
汽車は再び驛外に停りぬ。
此時たまたま雲を洩る入日に
大河の氷奇しき草色に光れり。

エトワアルの廣場

土から俄かに
聳化して出た蛾のやうに、
わたしは突然、
地下電車から地上へ匐ひ上つた
巨大な凱旋門が眞中に立つて居る。
それを繞つて
マロニエの並木が明るい綠を盛上げて居る。

そして人間と、自動車と、乘合馬車と、
乘合自動車との點と塊が
命ある物の
整然とした混亂と
自主獨立の進行とを、
斷間なしに
八方の街から繰出し、
此處を縱横に縫つて、
斷間なしに
八方の街へ繰込んで居る。

おお此處は偉大なエトワアルの廣場だ……
わたしは思はずじつと立竦んだ。

わたしは思つた、——
これで自分は此處へ二度來る。
この前來た時は
いろんな車に轢き殺され相で、
怖くて、
廣場を横斷する勇氣が無かつた。
そして輻になつた路を一つ一つ越えて、

モンサウ公園へ行く路の
アヴニウ・ウッスの入口を見附ける爲に、
廣場の圓の端を
長い間ぐるぐると歩いた居た。
どうした氣持のせいでか、
アヴニウ・ウッスの入口を見附け損つたので、
凱旋門を中心に
二度も三度も廣場の圓の端を
馬鹿らしく歩き廻つて居るのであつた。

けれど今日は用意がある、
わたしは地圖を研究して來て居る。
今日わたしの行くのは
バルザック街の裁縫師の家だ。
バルザック街へ出るには、
この廣場を前へ
眞直に横斷すればいいのである。

わたしは斯う思つたが、併し、
眞直に廣場を横斷するには

縱横に斷間なく馳せちがふ
速度の疾いいろんな車が怖くてならぬ。
廣場へ出るが最期
二三歩で
轢き倒されて傷をするか、
轢き殺されてしまふかするであらう……

この時、わたしに、突然、
何とも言ひやうのない
睿智と威力とが内から湧いて、

わたしの全身を生きた鋼鐵の人にした。
そして日傘と嚢とを提げたわたしは
決然として、馬車、自動車、
乘合馬車、乘合自動車の渦の中を眞直に横ぎり、
あわてず、走らず、
逡巡せずに進んだ。
それは佛蘭西の男女の歩くが如くに歩いたのであつた。
そして、わたしは、
わたしが斯うして悠悠と歩けば、
速度の疾いいろんな怖ろしい車が

却つて、わたしの左右に
わたしを愛して停まるものであることを知つた。

わたしは新しい喜悦に胸を跳らせながら、
斜めにバルザック街へ入つて行つた。
そして裁縫師の家では
午後二時の約束通り、
わたしの繻子のロオヴの假縫を終つて
若い主人夫婦がわたしを待つて居た。

ムウラン・ド・ラ・ギヤレットにて

群をはなれてエランダに
君ただひとり立つなかれ、
今宵は空の月さへも
人の踊を覗けるに。

いざ君、室内の卓に凭り、
ワルツの曲を聞きながら、

夜ひと夜取れよ、花の香と、
香料の香と、さかづきと、

女の燃ゆるまなざしと、
きやしやに艶めく肉づきと、
輕き笑まひと、足取と、
さらに渦卷く愛と美を。

薄暮

ルウヴル宮の正面も、
中庭にある桃色の
凱旋門もやはらかに
紫がかつて暮れてゆく。
花壇の花もほのぼのと
赤と白とが薄くなり、
並んで通る戀人も

ひと組ひと組暮れてゆく。
君とわたしも石段に
腰掛けながら暮れてゆく。

ヱルサイユの逍遙

ヱルサイユの宮の
大理石の階を降り、
後庭の六月の
花と、香と、光の間を過ぎて
われ等三人の日本人は
廣大なる森の中に入りぬ。

三百年を經たる楢の大樹は
明るき綠の天幕を空に張り、
その下に紫の苔生ひて、
物古りし石の卓一つ
匐ふ蔦の黃綠の若葉と
薄赤き蔓とに埋まれり。

二人の男は石の卓に肱つきて
苔の上に横たはり、
われは上衣を脫ぎて

楢の根がたに蹲踞りぬ。
快き靜けさよ、かなたの梢に小鳥の高音……
近き涼風の中に立驛香草の香り……

わが心は宮の中に見たる
ルイ王とナポレオン皇帝との
華麗と豪奢とに醉ひつつあり。
后達の寢室の清清しき白と金色……
モリエエルの演じたる
宮廷劇場の靜かな猩猩緋……

されど、樂しきわが夢は覺めぬ、
目まぐるしき過去の世紀は
かの王后の榮華と共に亡びぬ。
わが目に映るは今
脆き人間の外に立てる
撫の大樹と石の卓とばかり。

ああ、われは淋し、
わが追ひつつありしは

人間の短命の生なりき。
いでや、森よ、
われは千年の森の心を得て、
悠悠と人間の街に歸るよしもがな。

磯の朝

さあ、あなた、磯へ出ませう、
夜通し涙に濡れた
氣高い、清い目を
世界が今開けました。
おお夏の曉、
この曉の大地の美しいこと、
天使の見る夢よりも、

聖母の肌よりも。

海峽にはほのぼのと
白い透綾の霧が降つて居ます。
そして其處の、近い、
黑い暗礁の
疎らに出た岩の上に
鷺が五六羽、
首を羽の下に入れて、
脚を淺い水に浸けて、

じつと未だ眠つて居ます。
彼等を驚かさないやうに、
水際の砂の上を、そつと、
素足で歩いて行きませう。

まあ、神神しい、
涼しい風だこと……
世界の初めにエデンの園で
若いイヴの髪を吹いたのも此風でせう。
ここにも常に若い

みづみづしい愛の世界があるのに、
なぜ、わたし達は自由に
裸のままで吹かれて行かないのでせうね。
けれど、また、風に吹かれて、
帆のやうに袂の揚る快さには
日本の着物の幸福も思はれます。

御覽なさい、
わたし達の歩みに合せて、
もう海が踊り初めました。

緑玉の女衣に
水晶と黄金の笹縁……
浮き上りつつ、沈みつつ、
沈みつつ、浮き上りつつ……
そして、その擴がつた長い裾が
わたし達の素足と縺れ合ひ、
そしてまた、ざぶるうん、ざぶるうんと
間を置いて海の鐃鈸が鳴らされます。
あら、鷺が皆立つて行きます、

俄かに紅鷺のやうに赤く染つまて……
日が昇るのですね、
霧の中から。

フオンテンブロウの森にて

秋の歌はそよろと響く、
白楊と毛欅の森の奥に。
かの歌を聞きつつ、我等は
しづかに語らめ、しづかに。

褪めたる朱か、
剝がれたる黄金か、

風なくて木の葉は散りぬ、
な拂ひそ、よしや、衣にとまるとも。

それもまた木の葉の如く、
かろやかに一つ白き蝶
舞ひて降れば、尖りたる
赤むらさきの草ぞゆするる。

眠れ、眠れ、疲れたる
春夏の蹄子よ、蝶よ。

かほそき路を行きつつ、猶我等は
しづかに語らめ、しづかに。

おお此處に、岩に隱れて
ころころと鳴る泉あり、
水の歌ふは我等がためならん、
君よ、今は語りたまふな。

ミュンヘンの宿

九月の初め、ミュンヘンは
早くも秋の更けゆくか、
モツアルト街、日は射せど
ホテルの朝のつめたさよ。

青き出窓の欄干に
匍ひかぶされる蔦の葉は

朱と紅と黄金に染み
照れども朝のつめたさよ。

鏡の前に立ちながら
諸手に締むるコルセット、
ちひさき銀のボタンにも
しみじみ朝のつめたさよ。

伯林停車場

ああ重苦しく、赤黑く、
高く、濶く、奥深い穹窿の、
神秘な人工の威壓と、
沸沸と迸る銀白の蒸氣と、
爆ぜる火と、哮える鐵と、
人間の動悸、汗の香、
および靴音とに、

絶えず窒息り、
絶えず戰慄する
伯林の嚴かなる大停車場。
ああ此處なんだ、世界の人類が
靜止の代りに活動を、
善の代りに力を、
弛緩の代りに緊張を、
平和の代りに苦闘を、
涙の代りに生血を、
信仰の代りに實現を、

自ら探し求めて出入りする、
現代の偉大な、新しい、
人性を主とする本寺は。
此處に大きなプラットフォオムが
地中海の沿岸のやうに横はり、
その下に波打つ幾線の鐵の繩が
世界の隅隅までを繋ぎ合せ、
それに斷えず手繰り寄せられて、
汽車は此處に三分間毎に東西南北より着し、
また三分間毎に東西南北へ此處を出て行く。

此處に世界のあらゆる目覺めた人人は、
髪の黑いのも、赤いのも、
目の碧いのも、黃いろいのも、
みんな乘りはづすまい、
降りはぐれまいと氣を配り、
固より發車を報せる鈴も無ければ、
みんな自分で檢べて大切な自分の「時」を知つてゐる。
どんな危險も、どんな冒險も此處にある。
どんな鋭音も、どんな騷音も此處にある、
どんな期待も、どんな昂奮も、どんな痙攣も、

どんな接吻も、どんな告別も此處にある。
どんな異國の珍しい酒、果物、煙草、香料、
麻、絹布、毛織物、
また書物、新聞、美術品、郵便物も此處にある。
此處では何もかも全身の氣息のつまるやうな、
全身の筋のはちきれるやうな、
全身の血の蒸發するやうな、
鋭い、忙しい、白熱の肉感の歡びに滿ちてゐる。
どうして少しの隙や猶豫があらう、
あつけらかんと眺めて居る休息があらう、

乘り遲れたからと云つて誰が氣の毒がらう。
此處では皆の人が唯だ自分の行先許りを考へる。
此處へ出入りする人人は
男も女も皆選ばれて來た優者の風があり、
額がしつとりと汗ばんで、
光を睨み返すやうな目附をして、
口は歌ふ前のやうにきゆつと緊り、
肩と胸が張つて、
腰から足の先までは
きやしやな、しかも堅固な植物の幹が歩いてゐるやう

である、
みんなの神經は苛苛として居るけれど、
みんなの意志は悠揚として、
鐵の軸のやうに正しく動いて居る。
みんながどの刹那をも空しくせずに
ほんとに生きてる人達だ、ほんとに動いてる人達だ。
あれ、巨象のやうな大機關車を先きにして、
どの汽車よりも大きな地響を立てて、
ウラジホストックから倫敦までを、
十二日間で突破する、

ノオル・デキスプレスの最大急行列車が入つて來た。
怖しい威嚴を持つた機關車は
今世界の凡ての機關車を壓倒するやうにして駐つた。
ああ、わたしも是れに乘つて來たんだ、
ああ、またわたしも是れに乘つて行くんだ。

砂の塔

砂の塔

「砂を掴んで、日もすがら
砂の塔をば建てる人
惜しくはないが、其時が、
さては無益な其勞が。

しかも兩手で掴めども
指のひまから砂が洩る、

する、する、すると砂が洩る、
輕く悲しく砂が洩る。

寄せて、抑へて、積み上げて、
抱へた手をば放す時、
砂から出來た砂の塔
直ぐに崩れて砂になる。」

砂の塔をば建てる人
これに答へて呟くは、

「時が惜しくて砂を積む、
命が惜しくて砂を積む、」

一すぢ殘る赤い路

藤とつつじの咲きつづく
四月五月に知り初めて、
わたしは絶えず此處へ來る。
森の木蔭を細やかに
曲つて昇る赤い路。

わたしは此處で花の香に

慧の吐息の噴くを聞き、
廣い青葉の飜るのに
若い男のさし伸べる
優しい腕の線を見た。

わたしは此處で鳥の音が
胸の拍子に合ふを知り、
花のしづくを美くしい
蝶と一所に浴びながら、
甘い木の實を口にした。

今はあらはな冬である。
霜と、落葉と、木枯と、
爛れた傷を見るやうに
一すぢ殘る赤い路……
わたしは此處へ泣きに來る。

我手の花

我手の花は人染めず、
みづからの香と、おのが色。
さはれ、盛りの短かさよ、
夕を待たで萎れゆく。

我手の花は誰れ知らん、
入日の後に見る如き

うすくれなゐを頰に殘し、
淡き香をもて呼吸すれど。

我手の花は萎れゆく……
いと小やかにつつましき
わが魂の花なれば
萎れゆくまますべなきか。

古巣より

空の嵐よ、呼ぶ勿れ、
山を傾け、野を碎き、
所定めず行くことは
地に住むわれに堪へ難し。

野の花の香よ、呼ぶ勿れ、
若し花の香となるならば

われは刹那を香らせて
やがて跡なく消えはてん。

木の間の鳥よ、呼ぶ勿れ、
汝れは固より羽ありて
枝より枝に遊びつつ、
花より花に歌ふなり。

すべての物よ、呼ぶ勿れ、
われは變らぬ囁きを

乏しき聲にくり返し
初戀の巣にとどまりぬ。

善しや惡しやを言ふ人の

善しや惡しやを言ふ人の
稀にあるこそ嬉しけれ、
ものかずならで隅にある
わが歌のため、我れのため。
いざ知りたまへ、わが歌は
泣くに代へたるうす笑ひ、

灰に着せたる色硝子、
死に隣りたる踊なり。
また知りたまへ、この我れは
春と夏とに行き逢はで、
秋の光を早く吸ひ、
月のごとくに青ざめぬ。

闇に釣る船

（安成二郎氏の歌集「貧乏と戀と」の序詩）

眞黑な夜の海で
わたしは一人釣つて居る。
空には嵐が吼え、
四方には渦が鳴る。

細い竿の割に
可なり澤山に釣れた。

小さな船の中七分通り
光る、光る、銀白の腹が。

けれど、鉤を離すと、直ぐ、
どの魚もみんな死つてしまふ。
わたしの釣らうとするのは
こんなんぢやない、決して。

わたしは知つて居る、わたしの船が
だんだんと沖へ流れてゆくことを、

そして海がだんだんと
深く險しくなつてゆくことを。

そして、わたしの欲しいと思ふ
不思議な命の魚は
どうやら、わたしの絲の達かない
底の底を泳いで居る。

わたしは夜明までに
是非とも其魚が釣りたい。

もう絲では間に合はぬ、
わたしは身を跳らして摑まう。

あれ、見知らぬ船が通る……
わたしは慄く……
もしやあの船が先きに
底の人魚を釣つたのぢやないか。

灰色の一路

ああ我等は貧し。
貧しきは
身に病ある人の如く、
隱れし罪ある人の如く、
また遠く流浪する人の如く、
常に怖え、
常に安からず、

常に心寒し。

また、貧しきは
常に身を卑くし、
常に力を賣り、
常に他人と物の
駄獸および器械となり、
常に僻み、
常に呟く。

常に苦み、
常に疲れ、
常に死に隣りし、
常に耻と、恨みと、
常に不眠と飢と、
常にさもしき欲と、
常に劇し、き勞働と、
常に涙とを繰返す。

ああ我等、

之を突破する日は何時ぞ、
恐くは生のあなた、
死の時ならでは……
されど我等は唯だ行く、
この灰色の一路を。

厭な日

こんな日がある。厭な日だ。
わたしは唯だ一つの物として
地上に置かれてあるばかり、
何の力もない、
何の自由もない、
何の思想もない。

なんだか云つてみたく。
なんだか動いてみたいと感じながら、
鳥の居ない籠のやうに
わたしは全く空虛である。
あの希望はどうした、
あの思出はどうした。
手持不沙汰で居るわたしを
人は呑氣らしくも見て取らう、
また好いやうに解釋して

浮世ばなれがしたとも云ふであろ、
口の悪い、噂の好きな人達は
衰へたとも傳へやう。

何んとでも言へ……とは思つてみるが、
それではわたしの氣が濟まぬ。

砂

川原の底の價なき
砂の身なれば人採らず、
風の吹く日は塵となり
雨の降る日は泥となり、
人、牛、馬の踏むままに
壓しひしがれて世にありぬ。
稀に川原のそこかしこ、

れんげ、たんぽぽ、月見草、
ひるがほ、野菊、白百合の
むらむらと咲く日もあれど、
流れて寄れる種なれば
やがて流れて跡もなし。

あわれ淺ましのはかなさよ

怖ろしい兄弟

ここの家の名前人は
總領の甚六がなつてゐる。
欲ばかり勝つて
思ひやりの缺けて居る兄だ。
不意に、隣の家へ押しかけて、
庇ひ手のない老人の
半身不隨の亭主に、

「きさまの持つて居る
目ぼしい地所や家藏を寄越せ。
おらは不斷おめえに恩を掛けて居る。
おらが居ねえもんなら、
おめえの財産なんか
遠の昔に
近所から分け取りにされて居たんだ。
その恩返しをしろ」と云つた。
なんぼよいよいでも、
隣の爺には性根がある。

あるだけの智慧をしぼつて
甚六の言ひ掛りを拒んだ。
押問答が長引いて、
二人の聲が段段と荒くなつた。
文句に詰つた甚六が
得意な最後の手を出して、
拳を振上げ相になつた時、
多勢の甚六の兄弟が
がやがやと寄つて來た。
「腰が弱えなあ、兄貴、」

「脅しが足りなねえなあ、兄貴、」
「もつと相手をいぢめねえ、」
「なぜ、いきなり刄物を突き附けねえんだ、」
「文句なんか要らねえ、腕づくだ、腕づくだ、」
こんなことを口口に云つて、
兄を罵る兄弟ばかりである、
兄を闘ます兄弟ばかりである。
ほんとに兄を思ふ心から、
なぜ無法な言ひ掛りなんかしたんだと
兄の最初の發言を

咎める兄弟とては一人も居なかつた。
お怖ろしい此處の家の
名前人と家族。

駄獣の群

あはれ、此國の
怖るべく且つ醜き
議會の心理を知らずして、
衆議院の建物を見上ぐる勿れ。
禍なるかな、
此處に入る者は悉く變性す。
たとへば惡貨の多き國に入れば

大英國の金貨も
七日にて鑢に削り取られ
其正しき目方を減ずる如く、
一たび此門を跨げば
良心と、德と、
理性との平衡を失はずして
人は此處に在り難し。
見よ、此處は最も無智なる、
最も敗德なる、
はた最も卑劣無作法なる

野人本位を以て
人の價値を
最も粗惡に平均する處なり。
此處に在る者は
民衆を代表せずして
私黨を樹て、
人類の愛を思はずして
動物的利己を計り、
公論の代りに
私語と怒號と罵聲とを交換す。

此處にして彼等の勝つは
固より正義にも、聰明にも、
大膽にも、雄辯にもあらず、
唯だ彼等互に
阿附し、摸倣し、
妥協し、屈從して、
政權と黄金とを荷ふ
多數の駄獸と
みづから變性するにあり。
彼等を選擧したるは誰か、

彼等を寛容しつつあるは誰か。
此國の憲法は
彼等を逐ふ力無し、
まして選擧權なき
われわれ大多數の
貧しき平民の力にては……
かくしつつ、年毎に、
われわれの正義と愛、
われわれの血と汗、
われわれの自由と幸福は

最も臭く醜き
彼等獸獸の群に
寢藁の如く踏みにじらる……

舞ごろも

完

大正五年五月二十七日印刷
大正五年五月三十日發行

定價金壹圓

著作者　與謝野晶子

發行者　中村一六
東京市牛込區神樂町二丁目廿二番地

印刷者　高橋郁
東京市京橋區月町二十五番地
三協印刷株式會社

發行所　天弦堂書房
東京市牛込區神樂町二丁目二十二番地
振替口座東京二九五五九番

不許複製

與謝野晶子女史著（新刊）

感想及隨筆集

人及び女として

これ飽迄も眞實を求め自由を欲し虛僞を排して人としての「自己」に生きんとする女史が高鳴る自覺の聲なり。而して又、優麗閑雅なる女史が內生活の美しき記述なり。

總洋布製
函入美本
定價一八圓
送料八錢

吉井勇氏著

近刊

明眸行

定價六拾五錢
送料六錢

これ水莊記以後の叙情散文集也、美しき戀の歌物語也。

北國の雪に埋もれてありぬとよ明眸いかに雪をうつせし

若山牧水氏著

新刊

朝の歌

定價六拾五錢
送料六錢

牧水氏が最近の三崎生活及び北國羈旅中の歌數百篇を收む。新らしき一轉向を來せる著者が最近の傾向を語るは是れ。